

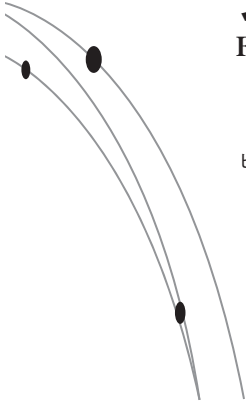
連載

フィールド・アイ Field Eye

ビクトリアから——①

ビクトリア大学 遠藤 貴宏

Takahiro Endo



日英日加と移動した研究者の軌跡から「労働」を振り返る (1)

今後3回にわたって、自分の所属先であるカナダの大学での「労働」について情報共有をできれば幸いである。第1回目では、自分の所属先の大学全体に当てはまるであろうことを取り上げてみたいと思う。第2回目と第3回目では、少し大学内部にズームインしてみる予定だ。第2回目ではビジネススクール、第3回目ではアジア太平洋センターに焦点を当てて、「労働」関連のネタを考える。

さて冒頭に申しあげたように、今回はビクトリア大学での「労働」の概要について書いてみたいと思う。私はカナダの西海岸にあるブリティッシュコロンビア州のビクトリア大学に籍を置いている。ブリティッシュコロンビア州といえばおそらくバンクーバーが最も有名だが、実は州の議事堂が位置する州都はビクトリアにある。詳しくはお手元のスマホで地図を表示してご覧いただきたいが、ビクトリアが位置しているのは、バンクーバー島である。この辺りが少しだけややこしく、バンクーバーという都市は、バンクーバー島にはないのだ。また、島というと、皆さんはどのくらいの大きさを想起されるだろうか。実は、(恐らくこれをご覧になっている多くの方にとって驚きのことだと思うが) バンクーバー島はかなり大きい島で、面積は九州全土と同じくらいである。その九州くらいの面積を擁するバンクーバー島にざっくり申しあげて80万人ほどの人が住んでいる。

私はこれまで、日本、英国、カナダの3つの国々に所在する大学で働いてきた。最初に職を得たのは英国

でのポストドク (Research Associate) のポジションであった。英国の刑事ドラマにハマり、時間を見つけては過去から遡って複数のシリーズを制覇していく一方、週末には近くの生鮮市場で生牡蠣を堪能する楽しみを見つけた。しかし、英国の大学での任期は2年と定まっており、ジャーナルパブリケーションをこなすことが至上命題として課されていたので、かなり落ち着かない日々を送っていたのを今でも覚えている。その後、日本で安定を得て、神戸大学と一橋大学にお世話になり、通算で6年ほど大学教員生活を送っていた。その後、縁があってカナダに移った。この記事を書きながら読まれている頃には、私のビクトリア大学での3年目が始まった頃である。ビクトリア大学に移ってきてからこれまでを振り返り、特に驚いた点2つを中心に見ていきたいと思う。

「欧米は契約社会だ」。こんなことを申しあげると、陳腐な表現で、読者の方々には分かりきっていることかもしれない。しかしながら、ビクトリア大学からジョブオファーをもらった際に、改めてカナダも契約社会なのだなあというのを痛感した。もちろん日本の大学にも労働契約書は存在するが、具体的には次の点で大きな違いを感じた。年間に支給される給与額、仕事の配分 (リサーチ、ティーチング、アドミニストレーションの割合) が明記されており、具体的にどのような業務を遂行することが期待されているのか、といったことが契約書に細かく書かれていたのだ。さらに契約社会であることを痛感したのは、授業の配分についてである。ビクトリア大学では3学期制が採用されており、自分の授業は2つの学期にそれぞれ1つずつというものであった。これは2年目のことだった。ある教員が体調不良になり、臨時で1つの授業を受け持てる代理の教員が学内で募集されていた。ちょうど興味のあるトピックだったこともあり、「情けは人の為ならず」の精神で手を挙げることにした。「情けは人の為ならず」は、ご存知のように、より良い労働環境を考えるならば、人を助けることで環境が改善し、自分にとっても便益があるというような意味合いである。より具体的に言えば、授業を1つ多くやって、その対価としての報酬をもらえるだろうというような考えはもっていなかった。ところが、である。2つのオプションがあることが分かったのだ。1つは、自分の契約書に記載されている担当授業数にエクストラで1つの授業を担当し、その分の (日本の非常勤などの相

場を遥かに超える)報酬を追加で受けるというものだ。もう1つは、2つの授業をその学期に担当し、もう1つの学期に予定されていた授業に代替することで、「プラマイゼロ」となり、報酬は増えない代わりに、その学期のみ授業を担当(=残りの2つの学期には授業を担当しない)というものであった。皆さんなら、どちらを選ぶだろうか？

もう1つ自分にとって驚きだったのは、先住民(indigenous peoples)に関することである。英国に滞在して以来、BBCのニュースは定期的にチェックしていた。カナダにおける先住民を対象としていた寄宿舎学校では、先住民の言語や文化が徹底的に否定されただけでなく、死に至るような暴力が(一過性というよりも)制度的に振るわれていたこともあるといった衝撃的な過去が次々と明るみに出るようになってきたのである。そうした背景のもと、先住民の血を引く人々への謝罪や補償のあり方をめぐって、カナダ社会が揺れているのを目にしてはいた。実際にカナダの大学で「労働」を意識するようになってから、カナダの大学の関係者から送られてくるメールの署名欄に、テリトリー・アクナレッジメント(Territory Acknowledgement)がしばしば含まれていることに気がついた。例えば、ビクトリア大学では次のような具合である：

We acknowledge and respect the ləkʷəŋən peoples on whose traditional territory the university stands and the Songhees, Esquimalt and WSÁNEĆ peoples whose historical relationships with the land continue to this day.

これは、大学が所在している領土で生活していた先住民の存在を認識し、それは決して過去のものとして忘却して良いわけではなく、現在も積極的なつながりを見出す必要があるのだ、ということを示唆しているような書き方に見える。

新しい教員向けの講習には、授業システムの使い方や、研究ファンドへの応募の方法、図書館の使い方な

どに加えて、先住民関連のトピックに関して、先住民の血を引く教員が主導して行うものがいくつか提供されていた。すべてに参加できたわけではないのであるが、自分が参加したものの内容をかい摘むと、大学の位置する領土の歴史や、近隣に存在した寄宿舎学校の所在地とそこでどのようなことが行われていたのか、カナダ社会がどのように変容してきたのか、といった点がカバーされていた。その上で、カナダ社会がどのような方向に向かうのか、向かうべきなのかといった点が議論された。「オレンジシャツ・デー」の取り組みなどについてもそこで知ったのであった。その当日、オレンジのシャツを着ていた先住民の子供が寄宿舎に入れられ、それ以来生きて帰ってくることは無かった。民族の壁なく、皆でオレンジのシャツをその日を記念して着ることにより、過去の間違いを決して忘れないとともに、最終的な和解を目指そうという、そういう日なのだと思えた。先住民に関する講習はかなり熱量のこもったものだったので、衝撃と影響をかなり受けた。少しでも理解を深めようとして、講習で言及されていたホワイトホースという映画などを見てみたが、もしもご興味があればご覧になってみると良いかもしれない。自分は、内容が衝撃的すぎて、悪夢を見たこともあった。さて、このテリトリー・アクナレッジメントであるが、大学関連のイベントが行われる際には耳にする。自らにかかわる直近の例で言うと、自分が司会進行をした PhD の学位論文の審査を始める際にも、テリトリー・アクナレッジメントから始めることが求められており、過去・現在・未来の領土・人のあり方に想いを馳せたのであった。

えんどう・たかひろ ビクトリア大学・ガスタフソンビジネススクール、ジャリスロスキー基金 CAPI チェア(日本)・准教授。主な論文に“Does Japan Still Matter? Past Tendencies and Future Opportunities in the Study of Japanese Firms,” *International Journal of Management Reviews*, Vol. 17, No. 1, pp. 101-123 (共著, 2015年)など。組織分析専攻。